

体が浄化される空間

新城市は愛知県の東北部、いわゆる奥三河にあり、静岡県と境を接する。仏法僧で有名な鳳来寺山がすぐ側にあるように、ごく近くまで南アルプスの山々は迫っており、そうした新城市の郊外、かなりの傾斜地に福津農園はある。

5月の連休を利用して福津農園におじやましたのであるが、新緑若葉の季節だったこともあって、農園を取り巻く山々は濃淡さまざまの木々の緑が交錯・混じり合い、輝いていた。そして農園は、一歩足を踏み入れると体がすうっと浄化されるような、実に気持ちのいい空気で満たされており、自然かつ不思議な空間でもあった。

地形を巧みに生かした農業

広さ1.5ヘクタールほどの農園であるが、南向きの斜面にはミカン、甘夏、柿、梅等の多様な果樹が植えられている。斜面の下は水田と畑、そしてピオトー

プの池があり、その間で鶏やヤギが飼われているように、地形を巧みに生かした農業が展開されている。

ここでは有機農業が行われているが、有機農業という以上に自然農法に近い。果樹園に生える雑草

時流を読む

**内外が注目する
中山間地の農業**

農的デザイン研究所代表 蔦谷 栄一

自給自立の家族農業

園主は松沢政満さんご夫妻であるが、①自立した家族農業であること、②楽しく豊かな百姓暮らしであること、を農園運営の基本としている。そして有機農業だから

いるということであり、海外からの来訪者も少なくない。農法や技術の勉強にとどまらず、憩いややすらぎを求めてくる人などその目的は区々。筆者が訪問した折も、豊田市からの夫婦が野草の芽を摘みにきていたが、農薬を気にする必要なくこれを使って野草酵素を作るとのこと。

中山間農業の1つのモデル

福津農園は、これからのわが国の中山間農業のあり方に重大な示唆を与えているように思う。規模拡大、生産性向上を指向するのではなく、家族経営を中心に、地形を生かし適地適作によって循環型農業に取り組み、自給自足を基本に豊かな百姓暮らしを楽しんでいく。そして農園をさまざまな人の交流の場とし、農業をつうじて、あらたなコミュニティづくり、地域づくりを実現していく。

グローバル化の時代だからこそ、中山間地の不利な条件を活かして逆に有利な条件に転化し、ここだけにしかできない農業で自給自立していく。これからの途だ。

はグラウンドカバーとして生かされ、野菜づくりは不耕起直播、そして野菜も果樹もいろいろの品種が混植されている。まさに微生物は勿論のこと、雑草も一部は野草として活かしていくなど、循環型の農業が展開されていた。

自給自立の楽しくやりがいのある農業が可能であり、しかも条件不利といわれる中山間地こそが有機農業の適地であるという。そして驚きもし、また当然とも受け止めたのが、この福津農園を訪れてくる人が年間で1,000名余も